

第 1 章

事業の総括評価

趣 旨

評価結果

総括評価

I 趣旨

国際社会青年育成事業は、「日本青年海外派遣」と「外国青年日本招へい」で構成されており、日本と諸外国の青年との交流を通じて青年相互の友好と理解を促進し、青年の国際的視野を広げ国際協調の精神を養い、国際協力の実践力を向上させることにより国際社会でリーダーシップを発揮できる青年を育成することを目的として実施している。

「日本青年海外派遣」は、国際社会が抱える課題をテーマとして設定し、テーマに沿った国に日本参加青年を派遣してケーススタディを行い、現代の複雑化したグローバル社会に適した国際的視野を持つ青年を育成することを目指している。令和5年度は、「IT の活用」「災害・気候変動問題への対応」という2つのテーマが設定され、日本の青年たちはそれぞれテーマに該当する地域として、エストニア共和国とドミニカ共和国へ派遣された。

「外国青年日本招へい」では、各テーマについて日本と諸外国の青年の対話を通じて理解を深め、青年相互の友好と理解を促進し国内各地域の青年の国際的視野を広げ、国際協調の精神を養い国際協力の実践力を向上させることで、国際社会でリーダーシップを発揮できる青年を育成する活動への貢献を目指している。令和5年度は、「IT の活用」をテーマにエストニア共和国・デンマーク王国、「災害・気候変動問題への対応」をテーマにドミニカ共和国・ペルー共和国の外国参加青年を招へいした。

両プログラムにおいて、国及び地方の行政組織等への表敬訪問、同世代の青年とのディスカッション、地元青年との交流など、様々なプログラムを実施している。特に日本青年海外派遣事業については、人的交流を重視しつつ相手国の多様性を理解し日本文化を発信できる内容にするため、毎

年改善を図っている。

今回、本年度事業の成果を測るため、日本参加青年及び外国参加青年（4カ国）全員を対象として事業終了時に事業評価アンケートを行うとともに、日本参加青年に対しては事前研修及び帰国後研修時に能力や態度を自己評価する機会を設け、その結果から比較調査を行った。評価の数値基準は、5段階評価（評価の高い方から5～1）を基本とした。また、日本参加青年の自己評価については、他の調査と比較する必要性から6段階評価（評価の高い方から6～1）を基本とした。

※本報告書では、日本青年海外派遣に焦点を当てて評価する。

※参加青年に対して行った5段階評価のアンケートの詳細については「第3章 資料編」参照。

II 評価結果

1. 事業目的の達成度

本事業の日本参加青年に対し、事業に参加した目的が達成できたかどうかについて5段階（5=とてもそう思う、4=そう思う、3=どちらともいえない、2=あまりそう思わない、1=全くそう思わない）による調査を行ったところ、100%が5段階評価の4以上を付け、全体的に非常に高い評価であった。

その他特筆すべき項目を以下に示す。

①プログラムへの満足度 [1-(3)]

「事業全体について、良い内容だったと思いますか」との問いに対して、日本参加青年の77.3%が5段階評価の4以上を付け、比較的高い評価であった。

②事業参加による人生などについての考え方の変化[1-(5)]

「あなたはこの事業への参加を通じて、人生、社会などについての考え方が変わったと思いますか」との問いに対して、日本参加青年の81.8%が5段階評価の4(大きく変わった)以上を付け、高い評価であった。本事業に参加した青年の今後の人生に少なからず影響を与える可能性があることがうかがえる。

③社会貢献活動への意欲[1-(6)]

「事業参加を通じて、社会貢献活動を始めたい、参加したいという意欲を持つようになりましたか」との問いに対して、日本参加青年の86.4%が5段階評価の4(ある程度意欲を持った)以上を付け、非常に高い評価であった。

④事業参加による参加青年の将来への影響[1-(7)]

「この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか」との問いに対して、日本参加青年の90.9%が5段階評価の4(役立つと思う)以上を付け、極めて高い評価であった。また、そのうち72.7%が5(とても役立つと思う)と回答していた。特に、どのように役立つと考えるかという項目(複数回答可)においては「交流国における人的ネットワークが広がる」と回答した参加者が77.3%、「自分の人格形成に対して良い影響を与える」と回答した参加者が77.3%、「自分の国際的視野が広がったことにより、理解力の向上につながる」と回答した参加者が63.6%だった。

2.日本参加青年の成長(自己評価の向上度)

本事業の日本参加青年に対し、事前研修時と帰国後研修時での自らの能力や態度を6段階(6=十分備えている、5=備えている、4=ある程度備

えている、3=あまり備えていない、2=備えていない、1=全く備えていない)で回答してもらい、事業の実施前後の比較調査を行ったところ、次のような結果になった。

「コミュニケーション能力」については、

4.6から5.1となり、0.5ポイントの増。

「多文化に対応する適応能力」については、

4.6から5.2となり、0.6ポイントの増。

「チャレンジ精神」については、

4.5から5.0となり、0.5ポイントの増。

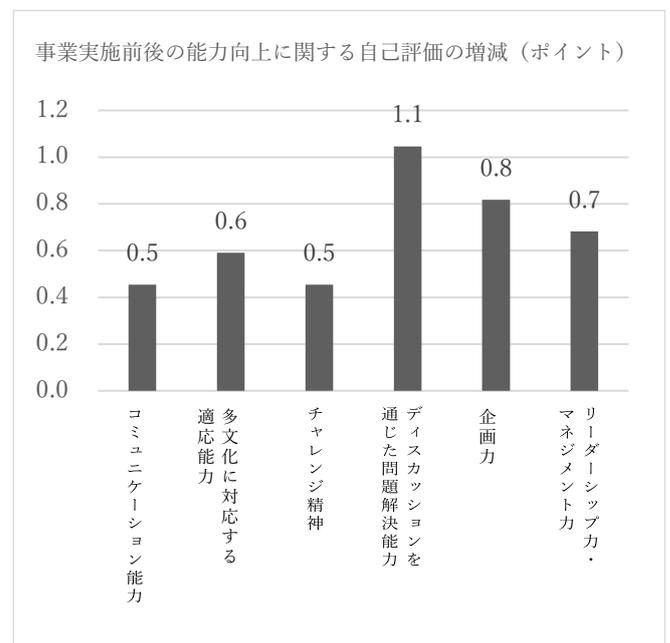
「ディスカッションを通じた問題解決能力」については、3.8から4.9となり、1.1ポイントの増。

「企画力」については、

3.9から4.7となり、0.8ポイントの増。

「リーダーシップ力・マネジメント力」については、3.9から4.6となり、0.7ポイントの増。

(ポイント数については、小数第二位を四捨五入)



渡航前の事前研修時と比較し、帰国後研修時では、全項目で0.5ポイント以上の向上が見られた。

最も伸び幅が大きかったのは、「ディスカッションを通じた問題解決能力」である。事業実施前後で、「十分備えている」が4.5%から27.3%に、

「備えている」が13.6%から31.8%にそれぞれ大幅に増加した。これは派遣団内での意見の相違や訪問国活動中での予期せぬ出来事に対して、団員全員が解決に向けて議論を繰り返した経験が大きく反映されていると考えられる。また、帰国後に実施された国際青年交流会議で外国参加青年とディスカッションを行ったことも、日本参加青年の自己評価の上昇に大きく影響していると思われる。

「多文化に対応する適応能力」は、事業実施前後で、「十分備えている」が13.6%から36.4%に増加、「備えている」が40.97%から50.0%にそれぞれ増加した。これは派遣国の文化を深く理解するだけでなく、現地の歴史や文化、産業を体験する施設への訪問や、ホームステイ等の活動を通じた人々との交流により自らの適応能力を確認できたことによるものと考えられる。

「企画力」についても、事業実施前後で「十分備えている」が4.5%から13.6%に、「備えている」が31.8%から54.6%にそれぞれ大幅に増加した。現地の青年との交流や文化紹介等の活動を通じて、自らプログラム内容を企画、実行するなどの経験を積み重ねたことで、自らの企画力をより強く認識したということだろう。

「リーダーシップ力・マネジメント力」については、事業実施前後で、「十分備えている」は9.1%から9.1%で横ばいだったものの、「備えている」が31.8%から50.0%に大幅に増加した。これは訪問国活動や国際青年交流会議で外国参加青年とのディスカッションなどにおいて、率先して行動したことによるものと考えられる。国際社会でリーダーシップを発揮できる青年を育成する本事業の目的を体現していると言えよう。

III 総括評価

最後に、今回の事業評価及び自己評価を合わせて総括する。

「事業の終了後、どのように事業で得た成果をいかしていきたいですか[8-(1)]」との問いに対して、日本参加青年からは「海外への視野を広げていく」「より世界について考えを深め、国際的な活動に積極的に参加していきたい」など自身の成長についてのコメントがあった。また、「他国の人と交流する楽しさや現地でしか学べないことの重要性を知った」など、プログラム内容を評価するコメントが多く寄せられた。これらのコメントから、派遣国や日本国内での活動や交流を通じて各国青年相互の理解と友好が促進され、参加青年の成長に良い影響があったものと判断する。派遣を通じて自身の成長を感じ胸を張って帰国した青年に、世界を舞台に活躍する未来の姿を見たように思われる。

青年たちは活動を通じ交流国や国際社会に対する理解が一層深まりリーダーシップ力等の向上も見られた。今後の各々の国際交流の活動において今回の体験が大きく好影響を及ぼすことが期待できる。

以上の評価結果から、本事業の目的である「日本と諸外国の青年との交流を通じて、青年相互の友好と理解を促進し、青年の国際的視野を広げ、国際協調の精神を養い、国際協力の実践力を向上させることにより、国際社会でリーダーシップを発揮できる青年を育成すること」に関しては、十二分な成果を収めたと評価する。